

# 第十話 諸宗ともに成佛の 為にせよ

丸川 春潭  
延時 真覚

やわ 夜話に曰く、われ佛法興隆の御政道、御公儀へ訴え奉  
り度く思えども未だ天道に許されず、先づ先祖先達、血の涙  
を流し修し行じ残し置かれたる處の佛法御下知なき故に廢  
れ果てり。是れを御捨てなされ御外護に預からざる事我等の  
迷惑是にすぎず、兎角御下知無くては佛法正理なるべからず。  
偏へに佛法正理なるやうに御下知仰ぎ奉ると指し出で指し  
出で御訴訟申し上げ度き事大願也。亦曰く、哀れ御意を以て  
佛法を直さば只一口にて手もなく直すべし。此前よりはれを  
思ふに自由に云れざりしが今はよう飲み込んで居る間、天下  
の佛法を只一言で忽ち直すべし。

時に僧問う、如何様なる一言なりや。師答えて曰く、諸宗  
ともに成佛の為にせよと此の一言を以て忽ち正法になす  
事也。然る間、諸宗を集め誰か成佛の為にするぞと僉議  
すべし。文字の為、智者の為、位の為、寺の為にするは皆是  
れ成佛の為に非ずと僉議し教え修さすれば一筋に正法に成  
る也。是を申し上げ度き念願計り也。(上-9)

本文に入る前に、鈴木正三和尚が唱導された仏教観について、知っ

ておく必要があります。正三和尚は、三河武士の出身であり、彼の唱導する仏教の中には、三河武士としての烈々たる気風がみなぎっております。正三和尚は、武士でありながら好んで寺院に立ち寄り、多くの曹洞宗あるいは臨済宗の禅僧と親交があったのであります。正三和尚は、臨済宗の大愚和尚に従って出家剃髪したともいわれておりますが、定かではありません。しかし、正三和尚の語録を『る あんきょう驢鞍橋』として著した門人の恵中は、正三和尚を曹洞宗であると明言しております。しかし、正三和尚にあっては、宗派ということを一として問題にしていなかったと思われるのであります。正三和尚は、禅者として禅の修行をしていたけれども、仏教のうちの他の法門にも積極的な意義を認めていたのであります。正三和尚は、一般民衆に向って、ひたすら念仏を唱えよということを教えております。また、70歳を超えた一老人に対しては、「70になっては、もはや修行も坐禅もままならない。したがって、十二時中、念仏の中に飛び込みなさい。」と教えている。

また、「口に言う処は、老子の教えも、孔子の教えも、外道の教えも、仏道も同じであって、少しも変ることはない。」「しかしながら、どの教えも皆、分別を以て修しつめたる処を至極として、分別の外に心の開くと云う事を知らず、仏祖の道は、心の開くる事を本意とする。」「同じ仏教の中でも、とかく經典の教えにとられる。しかし、禅のみは文字に依らず、道理を離れてただ只意を得ることを本意とする。」このように、正三和尚の究極の立場は、禅宗の金看板である「ふりゆう不立文字 もんじ きょうげべつでん教外別伝 じきしにんしん直指人心 けんしやうじやうぶつ見性成仏」にあったのであります。

や わ夜話に曰く、わ我れぶつぽうこうりゆう佛法興隆のごせいどう御政道、ごこうぎ御公儀へうった訴えたてまつ奉り度く思おもえどもいまだ未だてんどう天道にゆる許されず、ま先ぜんぜんだつ祖先達、ち血なみだの涙をなが流ししゅ修しぎょう行じこの残おし置かれたるお處のぶつぽう佛法御下知なき故にゆえ廃れ果てり。

ある夜、正三和尚が言われるのに、「私は、仏法が興隆するような政治が行われるように幕府に進言しようと思っているが、世の中の機

運がまだそうなっていない。我々の先輩たちが血の涙を流して修し行じて残してくれた仏教という精神的遺産が、幕府の指図がないために廃れ果てようとしている。」

是れを御捨てなされ御外護に預からざる事我等の迷惑是にすぎず、  
とかくごけちなぶっぼうしょうり  
兎角御下知無くては佛法正理なるべからず。

この仏教という精神的遺産を捨て置いて、下護して下さらないということは、誠に迷惑千万な話である。いずれにしても、「仏法は、正しい道理である。」という將軍家の御墨付きがなければ、世の中に通用するものではない。

偏へに佛法正理なるやうに御下知仰ぎ奉ると指し出で指し出で御  
そしょうもうあたことたいがんまりまたいわあわぎょいもつぶっぼうなおただ  
訴訟申し上げ度き事大願也。亦曰く、哀れ御意を以て佛法を直さば只  
ひとくちてなお  
一口にて手もなく直すべし。

「仏法は、正しい道理である。」という御墨付きを賜るべく書状を以って上申したいというのが、私の大願である。鈴木正三和尚は、「幕府の御意向があれば、廃れ果てようとしている仏法をただ一言で簡単に立て直すことができる。」と言われる。

徳川幕府は、当時、仏教教団の組織に対して政治的に干渉し、統制していたが、教団内部の僧徒の日常生活については極端な干渉をしないで放任していたのであります。ところが鈴木正三和尚は、「このような放任の故に、仏教が乱れてしまっている。だから国家の力によって、これを改革しなければならぬ。」と考えて、幕府にこの旨を上申しようとしていたのであります。

此前より是れを思ふに自由に云れざりしが今はよう飲み込んで居る  
あいだてんかぶっぼうただいちごんたちまなお  
間、天下の佛法を只一言で忽ち直すべし。

以前から、このようなことを思っていたけれども、浅学非力の故に

自由に言われなかった。しかし今は、良く理解しているから、天下の  
 仏法をただ一言で直すことができるであろう。

時に僧問う、如何様なる一言なりや。師答えて曰く、諸宗ともに  
 成佛の為にせよと此の一言を以て忽ち正法になす事也。

すると、一人の坊さんが質問をした。「それは、どういう一言で  
 ございますか？」すると、鈴木正三和尚は、「禅でも、浄土真宗でも、  
 日蓮宗でも、ただ成仏のためにせよ。この一言を以って、正しい道を  
 説く仏法というものに立ち返ることができる。」と言われたのであり  
 ます。

この「諸宗ともに成佛の為にせよ。」というのが、本日の提唱の  
 主題でございます。ここに「成仏」という言葉が出てきましたが、こ  
 のことについては、昨年の第1回修禅会で提唱しております。ある日、  
 一人が来て「成仏するには、どうすれば良いでしょうか？」と問うた。  
 すると鈴木正三和尚は、「成仏するとは『空』になることである。」  
 と答えられた。正三和尚の言われる「空」は、大乘仏教の根本思想で  
 あります。この「空」という言葉は、言い換えれば、「宇宙生命」、「絶  
 対無」あるいは単に「無」という言葉に置き換えても良いのでありま  
 す。われわれ人間禅では、これを「如」の一字で表わしている時もあり  
 ます。老子の『道德経』には、【物あり、混成し、天地に先立って  
 生ず、寂たり寥たり。独立して改めず、周行して殆からず、以て  
 天下の母たるべし。吾れその名を知らず、これを字して道といい、  
 強いて名をなして大という。】とあり、その一物を「大道」と表現し  
 ているのであります。

鈴木正三和尚は、「成仏するとは、『空』になることである。」と言  
 われる。それでは、「空」になるにはどうすれば良いのか？ そのた  
 めには、まず数息観で三昧の力を養い、理窟・道理をすっかり殺し尽  
 すしか方法はないのであります。結局、まず三昧の力を養うのが先決

問題であります。三昧は、境涯の高い・低い・深い・浅いにかかわらず、見性入理から見性了々底に到るまで、一貫した禅の修行の基礎であります。とにかく三昧を離れて禅の修行はなく、三昧は禅の修行の第一歩であると同時に奥の院であります。結局、三昧に入らずして悟りは絶対に開けないのであります。そのために、禅の修行では坐禅を組み、思慮分別を離れて、公案の工夫三昧となるのであります。そして、自分というものが畢ひっきょう 竟空であって、自他が不二であり、天地と自分とは一体であることを体得するのであります。「天地と我と同根、万物と我と一体」という言葉は空に徹したところから出た言葉でございます。

鈴木正三和尚も、「成仏するとは、『空』になることだ。」というのであります。私共が、忙しい中、やれ坐禅の、やれ参禅の、やれ作務さむの、やれ提唱のむちう、自分に鞭打って修行しておりますが、一体何のためにやっているのか？ その目指すところは「転迷開悟」であり、迷いの世界を離れて悟りの世界に立つということ、「成仏する」ということ、すなわちこの生身の自らが「仏になる」のであります。

然しか 間あいだ、諸しよしゆう 宗あつを集め誰たれか成じようぶつ 佛ための為にするぞとせんぎ 僉議すべし。

したがって、諸宗の管長、宗務総長といった方々を集めて、一体誰が成仏のために仏法をやっているのか、評議すべきである。

余談になりますが、鈴木正三和尚は、西暦1579年、今から428年前、この豊橋市の隣の豊田あすけ市足助町の地侍の家に生まれております。ちょうど信長が本能寺で倒れる3年前であり、いまだ戦国乱世の時代でございます。一族は、徳川家から年貢負担を免除される代わりに、戦いくさとなれば所定の人数を引き連れて馳せ参ずるといふ戦国時代の地侍でありました。鈴木正三和尚は4歳の時に、同じ年の遊び友達を亡くしました。その際に「死とは何ぞや？ 彼いずれの処に去るか？」と問

うたといえます。また戦国の世の常として、戦に出た大人が帰らぬ人となった、という経験も再三であったでしょう。こうした多感な少年時代に、近所のお寺で坊さんの法話を聞いて、「生と死」の問題を深く考えるようになったのではないのでしょうか？ 1590年、鈴木正三和尚が12歳の年に、鈴木一族は家康の関東移封いほうに従って、現在の茨城県しおごの塩子に移住したのであります。

ある夜、鈴木正三和尚は、晴れた夜空を仰いで、「この空は、平等にしてなんの差別もないのに、われわれ人間には、なぜ『他人』と『自己』、『生』と『死』というようなことがあるのだろうか。『他人』と『自己』との対立を超越し、『生』と『死』の対立を打破して、大自在の境地を得たい。その導きとなる教えは仏法をにおいて他にはない。」と思ったそうであります。

1600年、22歳の鈴木正三和尚は初陣として、関ヶ原の戦いを目指して中山道を進む徳川秀忠の軍に加わったのであります。さらに1614年、36歳の時には大阪冬の陣、翌年の夏の陣に参加しております。この間、足助あすけの庄の地に200石を拝領する旗本に取り立てられ、秀忠軍の先陣として、白兵戦や鉄砲攻撃などの修羅場をくぐり抜け、軍功をたてたものと思われまゝ。徳川幕府は、大阪夏の陣で天下統一を果たすと、元号を元和げんなと改めて平和の始まりを宣言し、一国一城令・武家諸法度・禁中並公家諸法度きんちゆうならびにくげしよはつと・寺院諸法度などを制定し、平和な国づくりのための布石を次々と打っていったのであります。

この頃、鈴木正三和尚は旗本として大阪城を警護する仕事についていたが、この時分に、鈴木正三和尚の最初の著作『盲安杖』もうあんじょうを執筆したのであります。『盲安杖』とは、「盲人の安心のための杖」という意味であります。鈴木正三和尚には、儒学に心酔する同僚がいて、この同僚から「仏法は隠遁いんとんなどを奨励して世を良くすることにつながらない。むしろ仏法は、世法に背くものである。」と言われたので、その反論として、この『盲安杖』もうあんじょうをまとめたと言われております。

鈴木正三和尚は、『<sup>もうあんじょう</sup>盲安杖』の中で天地の恩、師の恩、国王の恩、父母の恩と並んで衆生の恩もあると説いております。衆生の恩とは「農人の恩、職人の恩、衣類紡績の恩、商人の恩、一切の所作、互いに相助け合っている恩」と説明し、この事を理解して、諸人と分け隔てなく付き合うべきだと説いております。諸人が日常生活を営めるのも、農民が米を作ってくれたり、職人が衣服を作ってくれたり、商人がそれらを流<sup>りゅうつう</sup>通させてくれるからであり、「すべての仕事」が「互いに相助け合って」世の中が成り立っている、という考え方であります。こうした「仏法」なら「世法に背く」どころか、世法を正しく導くものであります。鈴木正三和尚の志もそこにあつたのであります。この思想が世間を導けば、平和な社会が到来し、「他人と自己」「生と死」の対立という矛盾も和らいでいくであろう。この『<sup>もうあんじょう</sup>盲安杖』は、徳川時代を通じて庶民大衆の修養の参考書としてかなり流布したということであります。旗本として大阪城を警護するなどという仕事は、当時の社会にあつては極めて恵まれたエリートの地位であります。その地位に留まっていれば、安楽な一生が保証されていた。しかし、鈴木正三和尚の自らの思想がそれを許さなかった。第二代將軍秀忠を中心とする江戸幕府が築きつつあつた新しい平和な社会の建設に、自由な思想家として貢献していこうという志を抱いたのであります。

1620年、鈴木正三和尚は42歳にして、武士の身分を捨て、禅僧として出家しました。その動機が今日の提唱の一節であります。それは、君恩に報いるための実践的な仏法興隆と、仏教法理によって民衆を教化することを治国の基本に置くという壮大な事業への参画・推進を生涯にわたる自らの「天職」として、実践しようという決意であつたのであります。幕府には、自らの出家を「<sup>まがごと</sup>曲事と<sup>おぼし</sup>思召めさば、御成敗あれ。」と切腹覚悟で届け出たのであります。それを聞いた老中が將軍に「ふと道心を起し候」と報告した所、秀忠は「それは道心というのではなく、隠居するということだよ。」と答えた。「出家」でなく「隠

居」とされたことによって、養子の重長しげながが鈴木正三和尚の跡目を継ぐことができたのであります。秀忠は、関ヶ原以来20年も仕えてきた鈴木正三和尚の人となりをよく知っていたのであり、しかも、その出家の志を見通していたのかも知れません。『盲安杖』には、「小利を捨てて大利に至れ」という項目があり、「至れる人は、誠のために身命をなげうって、名利にとどまらず、己をすてて大利に至る。」と説いているくだりがありますが、今鈴木正三和尚は、身を以ってそれを実践したのであります。

鈴木正三和尚59歳の時、1637年に島原の乱しげなりが起こり、弟重成と、その養子になっている鈴木正三和尚の実子重辰しげときが、この乱を平定するために島原に赴いております。島原の乱が平定されて2年後、重成は幕府の直轄地、すなわち天領となった天草の初代代官に任命されます。重辰とともに着任した重成は、2カ年にわたる戦乱で疲弊し尽くした天草の復興に、また荒廃した島民の心の回復に、と懸命な努力を始めたのであります。そのための一環として、重成は兄鈴木正三和尚の助けを求めた。これに応じて鈴木正三和尚は、63歳の時、天草に赴いております。鈴木正三和尚は「天草は、キリシタンの教えが氾濫はんらんした土地の跡である。そこで、各地にお寺を造って、正法しょうぼうを弘めたるならば、それによって仏の教えの大きく明らかなることが分かるであろう。」と重成に提言します。重成は、これに賛成して、さっそく幕府に願い出たところ、幕府から300石が与えられたのであります。そこで、32カ寺の寺院を天草の各地に建立します。そのうち1寺院だけを浄土宗とし、家康と秀忠せんぱいの尊牌を本堂に立て、あとは全て曹洞宗の寺院にしたのであります。鈴木正三和尚は、キリシタンの教義を論破するため、『破吉利支丹はきりしたん』という書物を書き、各寺院に一部ずつ保管させたのであります。鈴木正三和尚は、天草に留まること3年、荒廃した島民の心の回復のため献身的な努力を果たしたといわれています。



一方、重成は初代代官として、戦乱によって疲弊した天草の復興に努めましたが、復興は遅々として進みません。重成は、天草の年貢があまりに重すぎるとして、半減するべく幕府への上申を何度も繰り返したのであります。思い余った重成は、1653年、最後の建白書を書いて、江戸・駿河台の自邸において切腹し、自らの死をもって直訴したのであります。重成60歳であった。幕府は、その誠意に動かされ、本来「お家断絶」とすべきところ、「病死」扱いとし、重辰に家督を相続させ、二代目の天草代官に重辰を就任させたのであります。重辰も重成の遺志をついで精力的に上申をし続けた結果、重成の自刃後7年目にして年貢の石高半減が実現しております。

そのことに感謝した天草の人々は、重成・鈴木正三和尚・重辰の3人を守護神と仰ぎ、彼らの徳をしのぶために鈴木神社を建立したのであります。この鈴木神社は、通称「鈴木さま」といわれ、今も天草にあって人々に親しまれております。そして、300年も過ぎた今日、これが縁になって、天草と三河の豊田市足助町との交流が続いているということでございます。

私も昨年8月、天草に行って鈴木神社にお参りいたしました。自然に恵まれた閑静な小高い山の上に位置しておりました。

文字の為、智者の為、位の為、寺の為にするは皆是れ成 佛の為に非  
もんじ ため ちしゃ ため くらい ため てら ため みな こ じょうぶつ ため あら  
 ずとせんぎ おし しゅ ひとすじ しょうぼう な なり これ もう あ た 念議し教え修さすれば一筋に正 法に成る也。是を申し上げ度き  
ねんがんばんか なり  
 念願計り也。

学問のため、自分が仏教の学問をして学者になるため、あるいは位のため、寺が繁盛するためにするのは、皆これ成仏のためではないと言うことをよく詮議し、民衆を教化し、修行することこそが正 法である。すなわち、本当の成仏は、何かのためにすることではなく、自らが迷いを転じて悟りを開くこと、「見性」することを仏道修行の基本に取り戻すことと正三和尚は見切っており、このことを将軍様に申

し上げ、仏道諸宗派を本来の救済の原点に引き戻し、「成仏させる」ことによって民衆の安寧を図ろうと常々思っていたのであります。

それを鈴木正三和尚は、天草の地においても、正しょうぼう法ひろを弘めるべく幕府に提言し、お寺を造って、荒廃した島民の心を救ったのであります。

今日の提唱は、これで終わります。

(平成19年7月13日、豊橋市金西寺における修禅会の提唱より)

## 著者プロフィール



丸川春潭しゆんたん (本名 / 雄浄)

昭和15年生まれ。大阪大学理学部卒業。住友金属工業技監、日本鉄鋼協会理事を歴任。元大阪大学特任教授。現在、中国東北大学名誉教授。工学博士。昭和34年、人間禅立田英山老師に入門。現在、人間禅教団総裁・師家。庵号 / 葆光庵。



延時真覚のぶとき (本名 / 道春)

昭和16年、鹿児島県生まれ。昭和40年、熊本大学理学部卒業。平成14年、ウエルファイド(株)退社。剣道教士七段。昭和52年、人間禅松崎廓山老師に入門。現在、人間禅師家。庵号 / 芳雲庵。